

懐疑論の問題とは何か

江口貴将

筑波大学大学院博士課程

本発表の目的は、懐疑論の一般的源泉を特定し、その特定によって懐疑論の問題が如何なるものかを明らかにすることである。

私の考えでは、懐疑論は二つの一般的源泉を持つ。一つは、証拠による知識の過小決定 (underdetermination) であり、もう一つは、外的観点から為される知識に対する反省である。

本発表で主に扱う懐疑論は、外界の知識についての懐疑論だが、この懐疑論について言えば、当の知識の為の証拠は知覚であり、この知覚のみによっては外界の知識が完全には決定されない、つまり、知覚は外界の知識を過小決定している。そして、この過小決定が懐疑的諸仮説の生成を可能にするのである。

このような証拠による知識の過小決定は一つの事実と思われるが、この事実が如何にして発見されるのかというと、それは外的観点から証拠と知識を観察することによって、すなわち、それらを反省することによってである。要するに、我々が知覚と外界の知識を外的観点から眺めたとき、知覚による知識の過小決定が発見される。そして、外的観点におけるこの過小決定の発見は同時に懐疑的諸仮説の生成の可能性をも含意しているのである。

以上の手短な論述は、証拠による知識の過小決定という事実が反省によって見出されたことを述べているに過ぎない。このような事実の発見が「懐疑論の問題」を如何にして生み出すのか、これが続いて取り組まれる問いである。

私の考えでは、外的観点からの知識査定が懐疑論の問題を生み出す。外的観点からの知識査定とは、外的観点からの単なる知識の観察に止まらず、我々が現に有している知識に対して如何にしてそれを保持する正当な理由が与えられるのかをも考察することである。この考察によって初めて、同一の証拠から諸仮説が可能であるにもかかわらず、我々は如何なる理由に基づいて外界の知識を保持しうるのか、という問題に我々は直面する。そして、ここで直面するこの問題こそが「懐疑論の問題」であると思われる。

以上のように懐疑論の問題を特定した後に、現時点で私が有望と考える懐疑論の問題への二種類の応答方法が最後に簡略に提示される。